

# 2016年度東芝研究インターンシップのご案内

東芝研究インターンシップ制度は、大学院生に企業の最先端の研究開発に従事していただき、企業の研究開発の考え方を学び、次世代を担う研究開発者としての素養を磨くプログラムです

「自分の研究が将来社会にどのように貢献できるのか知りたい」  
 「社会で求められる研究開発者の役割を知り、それに向けて自分を成長させたい」  
 「卒業後の活躍の場を模索したい」  
 「自分の新たな可能性を探りたい」  
 など、熱意ある人を募集します

## 主要な研究分野

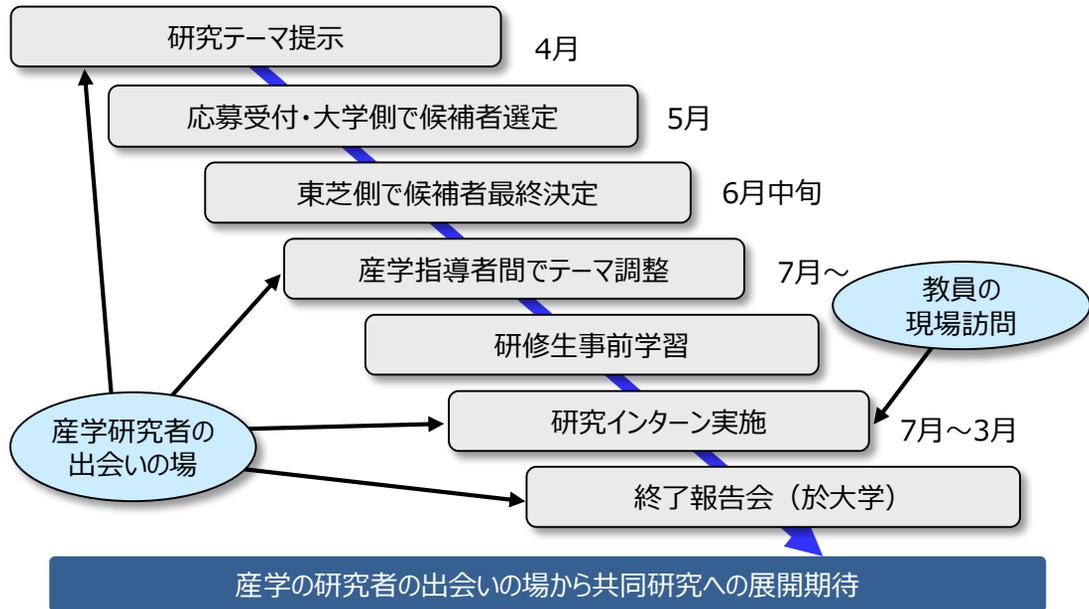
エネルギー・環境、情報通信技術、電子デバイス、材料

## 募集テーマ

2016年度東芝研究インターンシップ受入れテーマ一覧（別紙）を参照してください

募集要項	応募資格	修士(博士前期課程)または博士(博士後期課程) ※テーマによって異なりますので、受入れテーマの受入人数欄で確認してください
	研修期間	2016年7月～2017年3月 原則として、修士は1ヶ月以上、博士は3ヶ月以上 ※研修期間は、受入部門と相談の上決めます
	就業時間	原則として、8:15～17:00(昼休み60分) ※就業開始時刻と終了時刻は受入部門によって異なります
	研修場所	研究開発センター(神奈川県川崎市) 生産技術センター(神奈川県横浜市) IoTテクノロジーセンター(神奈川県川崎市) 電力・社会システム技術開発センター(神奈川県横浜市、川崎市、東京都府中市)
	待遇他	【交通費】当社規定により支給します 【手当】1,000円/日。2ヶ月を超える場合は2,000円/日 【宿泊施設】当社独身寮を無償で提供します 【傷害保険】大学にて加入していただきます(必須) 【誓約書】秘密保持や知的財産に関わる誓約書を提出していただきます
	応募方法	東芝研究インターンシップ申込書に必要事項を記入し、GMSI事務局に提出してください
	応募締切	2016年5月24日(火)東芝必着
	選抜方法	書類選考により、GMSI事務局経由で選考結果をお知らせします

## 実施手順



## 体験者の感想

実習を通じて短期間ではあったが、企業における研究開発の流れを実際に体験し、学ぶことができた。本実習では、企業と大学の研究に対する考えの違いを感じ、自身の未来像を考える上で非常に有意義な経験と振り返る。企業での研究は目標がはっきりしており、特に「コスト意識」「スピード重視」「社会に貢献」を意識し取り組まれていた。研究・開発・普及化に至るまでのコストに対する意識は、大学では学べないことだと思うため、良い刺激と示唆を受けることができた。このようなものづくりに対する考え方、人に分かり易く伝えることは基本的なことであるが、経験を積んで修得したいと感じた。また、企業での研究に対する姿勢、装置や実験の方法の説明、考察の仕方、分析、まとめ方、すべてにおいて、熱心にご指導ご鞭撻していただいた。はじめは特に、右も左もわからず、水処理に関する知識・背景なども詳しくなく、扱う装置にも不慣れだったにも拘わらず、丁寧にご指導してもらい、社員皆さんの温かみを感じた。私は何事も吸収していこうという気持ちで一生涯懸命取り組めた。  
(研修先：電力・社会システム技術開発センター 修士1年)

感想は主に二つある。第一に、今回の実習は、多くの失敗をしたが、自分の研究の進め方について見つめ直す良い機会になった。例えば、生体センサを装着して脈波を計測した最初の印象から、体動がノイズ源であるという思い込みを持って研究に取り組んでしまった。すべての要因を列挙することなく実験に取り掛かったため、他の要因に気付くまでに遠回りをした。この経験は問題解決の手順を見直すきっかけとなった。第二に、指導員を始め、社内の様々な研究者の研究スタイルに触れられたことは非常に良かった。研究に対するアプローチやツールの幅が広がり、今後の研究の自由度を高めることができた。  
(研修先：研究開発センター 博士1年)

普段から大学で行っている研究と分野が近いため、基本的な知識やツールで躓くことは少なく、その点ではスムーズに進めることができた。大学の研究と比べ、応用先が明確・すぐに実験結果が確認できる、といった特徴もあり、高いモチベーションを持って作業することができた。実働22日と短い期間の中で明確な成果を出す必要があり、常にスピード感を持って作業する必要があったことが印象深い。時間がない中で長期間成果が出ないことから頻りに焦りも生まれ、細かいミスや実験結果の取り直しが何度も発生した。しかし毎日の指導員とのミーティングを通して作業の区切り及び整理を行うことで、切り替えて作業に取り組み直すことができた。指導員との頻繁な打ち合わせも大学と比べて異なる環境の一つであったと感じた。これにより毎日の細かい作業の意図や結果を明確にする必要が生まれ、無駄の少ない作業ができたと考えている。  
(研修先：生産技術センター 修士1年)